

明日 への 話題

最善を尽くす



東京大学政策ビジョン研究センター
教授

みくにや かつのり
三國谷 勝範

昨今、一体改革を巡る議論や市場の動向等、重要な政治経済情報が多い。EU情勢、中東情勢、アジア情勢等、国際面も然りである。と同時に、企業・産業面の報道からも目を離せない。激しい環境変化のうねりの中で、日本をはじめ各国の企業は、勝残り・生残りをかけて、熾烈に戦略を展開している。アジア諸国の成長力や日本の現状を踏まえれば、グローバルに戦略を展開し、活路を見いだしていくことは避けられない。ここではボーダーレス化が進行している。

一方、社会保障制度や財政は、ボーダーの中にとどまり、一国でこの問題を解決していかなければならない。EUにおいては、まぶしい時代のEUの国境線は本当に細く見えた感がある。今は、この国境を巡って、経済と政治が激しくうねっている。一時に比べて国境線が太く見える感がある。

環境の変化やレジームの転換は、日本の過去の金融危機など内生的なものもあるが、リーマンショックやかつてのニクソンショック、オイルショックのように、相当部分は外來型である。自己の力によって活路を見いだしていく分野、将来を見据えて国民的な厳しい選択をしていかなければならない分野、そして、己の力だけによっては解決しえない分野と、様々な風景がある。いつの時代も多分同じだと思う。

将来の予測はあまりに幅があり、かつ、厳しい風景が含まれる。経済も技術も高度に広範化・複雑化してしまった。どこまでいわゆる想定をするか自体が難題である。ならば逆に、どのような状況であろうとも、楽観論と悲観論を超えて、その状態でなしうる最善、即ち人事を尽くしていくことが大事だと思う。産業は、日本の持ち味を生かしてグローバルに戦っていく。一国の問題は、皆で将来に責任を持った選択をしていく。国際交渉等については、日本が積極的に参加・発信していく。仮に、その点で今遅れているとしても、その布石と中盤に今から手を打っていく。

日本の産業を取り巻く情勢は極めて厳しい。繰り返しになるが、その中であって、勝残り・生残りをかけて、各事業体がグローバルに戦っている姿が報道されている。必ずや、将来につながるものと思っている。資本市場関係者を含めた関係者は、広くこの動きをサポートしていく必要がある。また、自らその一員として戦っていくことも必要である。その先にどういう天命が待っているかは、一つの夢としたい。